

## 今月のトピックス 「イネミズゾウムシについて」

イネミズゾウムシはもともと日本には生息しておらず、1976 年に愛知県で初めて発見されました。米国から輸入した資材に混じって侵入したと考えられています。この害虫は増殖が早く、しかも長距離を飛ぶことができるため侵入後はその分布が急速に拡大し、1986 年までに北海道や沖縄でも発生が見られるようになりました。侵入後わずか 10 年間で日本全土に蔓延したことになります。

### 1) 生態

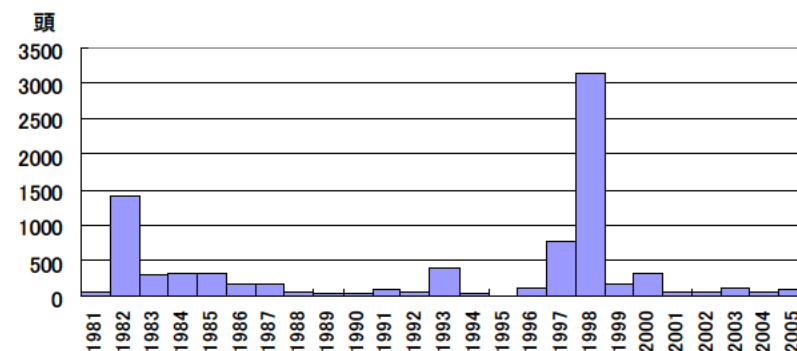
越冬した成虫(図 1)は田植え後に水田内に侵入します。日本では雄が見つかっておらず、雌だけで単為生殖しています。産卵は水面下で行われ、水中のイネの葉に卵が生み付けられます。卵は幼虫～蛹を経て成虫になります。この成虫は水田内のイネの葉を食害しますが、やがて、水田周辺の畦畔や土手に移り、雑草の葉を摂食します。その後、成虫は畦畔、土手の枯れ草や落葉の下に潜り込み、成虫のまま越冬します。



(図 1) イネミズゾウムシの成虫

### 2) 被害

本県での発生虫数は次第に減少し、一時期(1998 年)増加したこともあります(図 2)、被害そのものは減りました。発生虫数が減った原因は天敵が増加したり、イネミズゾウムシが病気にかかるようになってきたことなどが考えられます。成虫は葉脈に沿ってイネの葉を食べ、葉に白い筋状の跡が残ります(図 3)。幼虫は根を切断するため株が枯死することがあり、大きな被害をもたらします。



(図 2) イネミズゾウムシの成虫誘殺数の推移(松阪市嬉野川北町内の予察灯)

### 3) 防除

本県での被害は減少しているため、防除の必要がない場合が多くなっています。常発する水田では殺虫剤を育苗箱に施用することで予防します。常発地でなければ、本田で防除することが可能です。本田での虫数が 0.5 頭/株以上になれば被害の恐れがあるので防除が必要になります。



(図 3) 被害葉

### 4) 今年の特徴

4 月上旬から 5 月中旬にかけて気温はやや低く推移したため、県下全般的に葉の食害程度は少なく、成虫数も少ないようです。一部の地域では発生密度の高い水田もみられますので、被害状況を観察するなどの注意が必要になります。